

干し娘物語

鶴岡 和歌

「ねえ、わかちゃん干し娘^こに行つて見ない？」

「えっ干し娘、無理よ、無理です。」

突然、二歳年上のつぎちゃんは云う。

一九五四年、私は十八歳。市原市^{うらつ}湿津地区の農家に生まれて、中学校を卒業後は、米や煙草^{たばこ}作りの手伝いをしていた。一方東京湾沿いの市原市、袖ヶ浦、木更津の海辺に住む人びとは、漁業で生計を立てていた時代である。夏から秋にかけては簀^{すい}を立て網を張り海苔を付着させるために、深い海の中で作り、冬は海苔の採集のため沖合いの潮の流れの激しい中で、雨風あろうと作業をするのであった。

十一月十五日頃から翌年の三月の終り頃までが海苔の最盛期となっていた。この期間は何処の家も人手不足になるので、そんな時は山家^{やまが}の方面に干し娘を探しに来るのである。

農業に従事していた私のような娘たちは、農閑期の一月から三月末まで和裁や洋裁を習っていたのであった。娘達にとっても冬は土まみれの仕事をせずに屋内で裁縫ができるほっとした期間である。その娘達を海苔家業の人達は、無理を承知で頼みに来た、それは、干し娘と云^いつて、その家に住み込みで海苔を作るすべて

の仕事をする娘のことである。

友と「挑戦してみようか。」と決心した。干し娘を探しに世話人が来て、いろいろと細かく説明をし、納得させて連れて行く。自分の行く先はどんな家なのかわからない、世話人まかせである。

「二日後に迎えに来ますから、仕度して待っていて下さい。」と云われた。心の準備はしていたけど、時が迫つて来ると不安と心配でならない。私はどんな家でどんな家族かどんな感じの人達か、ご主人は恐い人なのか? どんな部屋で寝るのかなーなど想像した。

いよいよ車が来た、世話人は、

「娘さんをお預りします。どうぞご心配なさらずに。」と両親に挨拶をし家を離れた。

車は木更津へ向つて走る。

だんだん心細くなつて来た。潮の匂いのする東京湾が見える。この海で仕事をする家へ行くのだと、つぎちゃんと二人でぐつと手を握り合つた。すると運転手さんが、

「もうすぐ木更津ですよ。」

先に友を木更津の金田^{かねだ}と云う集落で降ろした。「では又ね。」と言葉少なに別れた。

車は更に田んぼ道を走る。私の行く所はどこだろうと不安に駆られこのまま帰りたいくなった。しばらくして着いたのは、奈良輪^{ならわ}と云う集落だった。その家は建具屋で海苔との兼業の家だった。お弟子さんが二人いて、挨拶して下さり二人共、二十歳位の好青

年だった。

家族は、お父さんとお母さんにお爺さんと五歳の清貴君の四人家族。

「今日からお世話になります、宜しくお願い致します。」と緊張した面持ちで言うと、

ご主人が、

「良く来てくれました。助かります。わからないことは何でも聞いてくれ。」と温かく迎えてくれてほっとした。家は六疊二間の小さな家で狭く感じた、台所も物がいっぱい、薪でご飯を炊く時代なので、食事作りがやりにくかったけど自分なりに熟してやり通した。

いつときの暇のない位、忙がしい毎日だ。清貴君の毎日の着替えは私でなければならぬほど懐いてくれて可愛い良い子供だった。

夕食後は風呂に入り一日の終りのひとりで家族みなでお茶をする。柿の好きな人達で「お姉ちゃん柿を剥いて」と言い食べながらその日の反省と明日の予定の話をしてくれる。

なんと忙がしい一日だろう！続くだろうかと思いつつ自分に活を入れ十時頃に就寝。

午前三時、起床の時間だ。

まだ眠い、外は暗い、ストーブもない。

火の気のない仕事場は静寂で寒い、冷たい手に息を吹きかけ乍ら準備する、昨日収穫して来た生海苔をお父さんは機械にかけて碎き大きな桶に入れる、水と何かを入れて掻き混ぜる、その隣りに

しつかりした台の上に簀の子を重ね用意する、左の手でぐっと押え、右の手で柄杓を持ち海苔を掬う、掬った海苔を勢いよく「サッ」と流す、その流し方がむずかしい。一枚の海苔の形が出来る、流した海苔はきれいで黒光りがしている、下手に流せば売り物にならない、経験たる技法を要する。

これをお母さんは夜が明けるまでに、一人で三千枚を敷くのです、私はそばで手伝う。

敷いた簀の子の海苔をリヤカーにきちんと立てて並べて積む、とても重たい、水が滴り落ちる、太陽が出る頃には干し場に持って行くのだが、三千枚の海苔は何回も運ぶ、それは重くて一人ではリヤカーは動かない、お母さんは妊娠していたので重い物は無理だった。そこでわが家には幸いなことに建具の弟子の、福の神がいる。そのお弟子さんが早く来てくれて運んでくれて棚に並べてくれたので私はおお助かりであった。

家から百メートルほど離れた干し場に行く途中に五十歳位のおばさんに会った。

「おはようございます。」とあいさつを、

「おはよう、あんた何処から来たのかい。」

「市原です。」

「市原かい、良く来てくれたね、あのね、海辺の人は荒い口調なんだ、ていねいな言葉はいらんからね。おはようでいいよ、皆ないい人ばっかだから安心して頑張りな。」と云って走って行った。今日の風は冷たいが快晴だ。

「今日は良い海苔が出来るぞー。」と気合いの入った声がする、

活気あふれる町の人々の様子が、山家育ちの私には不思議な位衝撃的な光景である。風のない静かな日は干し棚に並べるだけだが、風の強い日は一枚一枚に竹串を刺して止める、取り入れる時は傷まない様にいいねいにその三千本を抜く。

でも楽しいことも一つだけあった。

奈良輪の干し場一帯に聞える様に朝から夕方まで、スピーカーの音高く歌が流れるのだ。

春日八郎の「お富さん」が人気絶頂でこの唄が流れていた。自然と体が弾み辛さを忘れて頑張れた。午後二時は取り入れの時間だ、「急げ」の掛声がどこからともなく聞える。「早くせい、何してるんだー」と声が飛んで来る、自分に云われている様だった。快晴の日の海苔は最高の出来上りとなる、落さない様に壊れない様に大事に干棚から集めて、リヤカーに三千枚を乗せて運ぶ何回も。

そして次の仕事、家へ持ち帰った海苔は一枚づつ剥す作業、「パリッ」「パリッ」とお母さんの上手な手さばきは、さわやかに透き通る音が部屋にひびく、私もやってみたけど、うまく出来ず切ってばかりで売り物にならない。お母さんが「何枚失敗しても良いからやって見な。」と云ってくれた。三日目位には上手になった。そしてその次の仕事。

十枚づつ束ねる、爺ちゃんも手伝って、夕方までに箱に詰めて終り。出来上った海苔の箱は収集車が来て持って行く。

私はその先は今も知らずのまま。

お父さんは午前中は建具の仕事をしてをり午後は一人で舟を出し海苔の収穫に出て日暮れに帰る。私はお父さんの帰る頃を見計らって海岸まで迎えに行く日も度たびあった。

近所の人達の舟は次々と帰って来る、家の舟はいつも遅い、北風の吹く海岸で待っていると寒い。黒い波が打ち返す海、恐い恐かった。

点の様に遠くに見えた黒い舟「あつ」あれはもしかして家の舟か？早く来いと心で叫ぶ、来た来たやつと帰って来た。

「お帰りなさい。」

「待たせたな、遅くなつてごめんよ。」

「いいえ、お疲れさまです。お父さんは一人ですもの大変でしたでしょう。」と言うと、

「今日は沢山取れたんだ。」と

満面の笑みがこぼれた。それと同時に、私の寒さはどこかへ吹き飛んだ。

「明日は海の休日だ、皆な自由にゆっくりと休んでくれ。」とお父さんは皆なの前で、

「わっちゃん、金田のお友達から遊びに来ませんか、と電話があったから行って来な。」お母さんも同様に薦めてくれたので、その翌日に、市原から一緒に干し娘として来た友達のお世話になっている家に行くことになった。その晩はうれしくて夜が明けるのが待ち遠しかった。翌朝とても良い天気。お父さんが書いてくれた地図を片手に自転車奈良輪から金田へ向かって出発し

た、初めての休日だ。空は青い鼻唄まじりに颯爽と細い田んぼ道や砂利道を通り、友の家を想像しながら自転車漕いだ。

「着いたここだわ。」見てびっくり仰天。

入母屋造りの大きく立派な家で庭には大きな石が幾つもあり、石の間から形の良い植木が並んでいて、そこにひよどりが止っていた。

真に日本庭園の家であった。

内からお母さんときちやんが出て来て、

「どうぞ、どうぞ。」と家の中へ通された。

広く明かるい部屋、床の間には鳥の剥製や木製の扇子の置物に人形のケースなどが飾られてあった。豪邸と思った。

お座敷でお茶を入れて下さり、友とお互いの干し娘の話をたっぷりした。

「家はね、海苔を干す毎数が少ないから余り忙がしくなくて時間が余って困る時もある。」と云う、同じ干し娘でもこんなに違うのかと思った。話しているうちにお昼が近づいて来たのでお礼を云って帰る。友は良い家族に恵まれて良かったな一と思いい自転車のペダルを漕いだ。干し娘が終った後は会う機会もなく七十年も会っていない。

後にその友はその家の人に気に入られて、その家の息子さんと結婚し、幸福な人生を送っていると聞いた。良かったと思う一方に、うらやましいと感じている。

仕事も慣れて来て、要領も覚え、物事もうまく処理出来る様に

なり、自分も楽しくなって来た頃に、干し娘の終りの日が来た。清貴君は淋しそうに私の手をいつまでも離さなかったことを記憶している。建具職人の二人のお弟子さんも私を沢山助けて下さった。

「ありがとうございます。」と礼を云う、「又来て下さいね。」と皆さんが云って下さり見送ってくれてとても嬉しかった。

給料は「海苔漁業組合」と云う所で定められていたそうです、あの時代の干し娘は一ヶ月四千円と聞いていた。でも私は四千五百円頂いた、その他に私が失敗して売れない海苔を沢山頂き、半天の生地や靴下、マフラー、手袋など頂いて帰って来た。意気地のない私で辛かったこともあったけど、人生の一頁として大変良い経験をさせてもらったと思う。

その後、千葉県の西海岸は、京葉臨海工業地帯の造成として埋立てられることとなり、関係漁民の漁業権を持っている人は、全員放棄することになった、職を失い一時は路頭に迷う人もいたのですが、漁業権の代償金もありさまざまではあっただろうと推測する。

埋立てされた場所は

「京葉臨海工業地帯として今や市原のまた、日本の工業生産の中心を担ってめざましく、活躍している。」

「木更津の海は美しい。」

夕陽が沈む頃は、空は茜色、波は黄金色のさざ波が打ち寄せ、地平線はくつきりと、遠くには、どっしりとした富士山が望めて輝き広漠たる大地であった。

海苔家業宅の干し娘と云う仕事を通じて得たものは、私の生涯の宝物となった。

「心から感謝する。」